

# 教育勅語

(現代かなづかいによる読み方)

朕<sup>ちん</sup>惟<sup>おも</sup>うに我<sup>わ</sup>が皇<sup>こう</sup>祖<sup>そ</sup>皇<sup>こう</sup>宗<sup>そう</sup>國<sup>くに</sup>を肇<sup>は</sup>むること宏<sup>こう</sup>  
遠<sup>えん</sup>に徳<sup>とく</sup>を樹<sup>た</sup>つること深<sup>しん</sup>厚<sup>こう</sup>なり  
我<sup>わ</sup>が臣<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>克<sup>よく</sup>く忠<sup>ちゅう</sup>に克<sup>よく</sup>く孝<sup>こう</sup>に億<sup>おく</sup>兆<sup>ちやう</sup>心<sup>しん</sup>を一<sup>いつ</sup>に  
して世<sup>よ</sup>々<sup>よ</sup>厥<sup>そ</sup>の美<sup>び</sup>を濟<sup>な</sup>せるは此<sup>こ</sup>れ我<sup>わ</sup>が國<sup>くに</sup>體<sup>たい</sup>  
の精<sup>せい</sup>華<sup>か</sup>にして教<sup>きやう</sup>育<sup>いく</sup>の淵<sup>えん</sup>源<sup>げん</sup>亦<sup>また</sup>實<sup>じつ</sup>に此<sup>こ</sup>に存<sup>ぞん</sup>す  
爾<sup>に</sup>臣<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>父<sup>ふ</sup>母<sup>ぼ</sup>に孝<sup>こう</sup>に兄<sup>けい</sup>弟<sup>てい</sup>に友<sup>ゆう</sup>に夫<sup>ふう</sup>婦<sup>ふ</sup>相<sup>あ</sup>和<sup>わ</sup>し  
朋<sup>ほう</sup>友<sup>ゆう</sup>相<sup>あ</sup>信<sup>しん</sup>じ恭<sup>きやう</sup>儉<sup>けん</sup>己<sup>おの</sup>れを持<sup>じ</sup>し博<sup>はく</sup>愛<sup>あい</sup>衆<sup>しゆ</sup>に及<sup>およ</sup>ぼし  
学<sup>がく</sup>を修<sup>しゆ</sup>め業<sup>ぎやう</sup>を習<sup>しゆ</sup>い以<sup>も</sup>て智<sup>ち</sup>能<sup>のう</sup>を啓<sup>けい</sup>発<sup>はつ</sup>し徳<sup>とく</sup>器<sup>き</sup>を  
成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>し進<sup>しん</sup>で公<sup>こう</sup>益<sup>えき</sup>を広<sup>ひろ</sup>め世<sup>せい</sup>務<sup>む</sup>を開<sup>ひら</sup>き常<sup>じやう</sup>に國<sup>くに</sup>  
憲<sup>けん</sup>を重<sup>おも</sup>じ國<sup>くに</sup>法<sup>ほう</sup>に遵<sup>そん</sup>い一旦<sup>いつたん</sup>緩<sup>かん</sup>急<sup>きゆう</sup>あれば義<sup>ぎ</sup>勇<sup>ゆう</sup>公<sup>こう</sup>  
に奉<sup>ほう</sup>じ以<sup>も</sup>て天<sup>てん</sup>壤<sup>じやう</sup>無<sup>む</sup>窮<sup>きゆう</sup>の皇<sup>かう</sup>運<sup>うん</sup>を扶<sup>ふ</sup>翼<sup>よく</sup>すべし  
是<sup>か</sup>の如<sup>ごと</sup>きは独<sup>ひと</sup>り朕<sup>ちん</sup>が忠<sup>ちゅう</sup>良<sup>りやう</sup>の臣<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>たるのみな  
らず又<sup>また</sup>以<sup>も</sup>て爾<sup>に</sup>祖<sup>そ</sup>先<sup>せん</sup>の遺<sup>い</sup>風<sup>ふう</sup>を顯<sup>けん</sup>彰<sup>ちやう</sup>するに足<sup>た</sup>ら  
ん  
斯<sup>し</sup>の道<sup>みち</sup>は實<sup>じつ</sup>に我<sup>わ</sup>が皇<sup>こう</sup>祖<sup>そ</sup>皇<sup>こう</sup>宗<sup>そう</sup>の遺<sup>い</sup>訓<sup>くん</sup>にして  
子<sup>し</sup>孫<sup>そん</sup>臣<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>の俱<sup>とも</sup>に遵<sup>そん</sup>守<sup>しゆ</sup>すべき所<sup>ところ</sup>之<sup>これ</sup>を古<sup>こ</sup>今<sup>こん</sup>に通<sup>つう</sup>  
じて謬<sup>みゆ</sup>らず之<sup>これ</sup>を中<sup>ちゆう</sup>外<sup>がい</sup>に施<sup>せ</sup>して悖<sup>はい</sup>らず朕<sup>ちん</sup>爾<sup>に</sup>  
臣<sup>しん</sup>民<sup>みん</sup>と俱<sup>とも</sup>に拳<sup>けん</sup>々<sup>けん</sup>服<sup>ふく</sup>膺<sup>よう</sup>して威<sup>い</sup>其<sup>その</sup>徳<sup>とく</sup>を一<sup>いつ</sup>にせ  
んことを庶<sup>しよ</sup>幾<sup>おほ</sup>う

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

## 教育勅語の十二徳

- 一、孝行（こうこう）子は親に孝養をつくしましょう
- 二、友愛（ゆうあい）兄弟、姉妹は仲よくしましょう
- 三、夫婦ノ和（ふうふのわ）夫婦はいつも仲むつまじくしましょう
- 四、朋友ノ信（ほうゆうのしん）友だちはお互いに信じ合ってつき合しましょう
- 五、謙遜（けんそん）自分の言動をつつしみましょう
- 六、博愛（はくあい）広くすべての人に愛の手をさしのべましょう
- 七、修学習業（しゅうがくしゅうぎょう）勉学にはげみ職業を身につけましょう
- 八、智能啓発（ちのうけいはつ）智徳を養い才能を伸ばしましょう
- 九、徳器成就（とくきしょうじゆ）人格の向上につとめましょう
- 十、公益世務（こうえきせいむ）広く世の人々や社会の為になる仕事にはげみましょう
- 十一、遵法（じゅんぽう）法律や規則を守り社会の秩序に従いましょう
- 十二、義勇（ぎゆう）正しい勇気をもってお国の為に真心をつくしましょう

## 教育勅語の口語文訳

私は、私達の祖先が、遠大な理想のもとに、道義国家の実現をめざして、日本の国をおはじめになったものと信じます。そして、国民は忠孝両全の道を完うして、全国民が心を合わせて努力した結果、今日に至るまで、美事な成果をあげて参りましたことは、もとより日本のすぐれた国柄の賜物といわねばなりません。私は教育の根本もまた、道義立国の達成にあると信じます。

国民の皆さんは、子は親に孝養をつくし、兄弟、姉妹はたがいに力を合わせて助け合い、夫婦は仲むつまじく解け合い、友人は胸襟を開いて信じあい、そして自分の言動をつつしみ、すべての人々に愛の手をさしのべ、学問を怠らず、職業に専念し、知識を養い、人格をみがき、さらに進んで、社会公共のために貢献し、また法律や、秩序を守ることは勿論のこと、非常事態の発生の場合は、真心をささげて、国の平和と、安全に奉仕しなければなりません。そして、これらのことは、善良な国民としての当然のつとめであるばかりでなく、また、私達の祖先が、今日まで身をもって示し残された伝統的美風を、更にいつそう明らかにすることでもあります。

このような国民の歩むべき道は、祖先の教訓として、私達子孫の守らなければならないところであると共に、このおしえは、昔も今も変らぬ正しい道であり、また日本ばかりでなく、外国へ行っても、まちがいのない道でありますから、私もまた国民の皆さんとともに、父祖の教えを胸に抱いて、立派な日本人となるように、心から念願するものであります。

— 国民道徳協会訳文による —

## 明治天皇と教育勅語

明治天皇は、六百八十余年の長きにわたって続いた、武門の政治、封建の制度を改め、維新の大業をなすとげられました。近代日本の建設に当っては、特に教育の普及と道徳の

## 明治天皇と教育勅語

明治天皇は、六百八十余年の長きにわたって続いた、武門の政治、封建の制度を改め、維新の大業をなすとげられました。近代日本の建設に当っては、特に教育の普及と道徳の実践についてご心配になられ、㊶政治に左右されることなく、㊷軍政にとられず、㊸哲學的難解をさげ、㊹宗教的に一宗一派に片よらず、国民の誰でもが心がけ実行しなければならぬ徳目を挙げて、道徳の普及、教育の向上を熱心に望まれて、「教育に関する勅語」をお示しになりました。天皇が国民におおせられることは、詔勅という形式によって布告されています。

わたくしたち国民の、永遠不変の道徳教育の基礎ともいわれます、父子・兄弟・夫婦・友人間の人倫、謙遜、博愛、知徳の修得、道義的人格の完成、社会的義務の履行等、勅語にお示しになった大御心は、いかに時代が変わっても、本質的にはいささかの変わりもない訳です。私たちが歩まねばならない道しるべとして、常にその徳目を実践して立派な人となり、平和な家庭をもち、道徳的な良い社会づくりに努力して欲しいものです。

《明治神宮社務所刊》